

わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 11

医学ジャーナリスト 植田美津江

「母性」を考える

国語辞典を引くと、母性とは「母親としての性質」とある。少し前まで、女性なら誰でも母性があると信じて疑わなかったものだが、世間の現実が様々な姿で明らかになってくるにつれ、果たして母性とは何ぞや、との疑問がわくようになった。

母親が保険金目当てに子供を殺したり、虐待の結果に死に至らしめたりする、そんな事件が後を絶たない。また、犯罪ではないが、母性が辞典にあるような「母親としての性質」だとしたら、子供を生まない女性が増えている現象だって、母性の喪失と呼ぶことができ。子供を持たない理由

は、「教育費がかかる」「自由がなくなる」「仕事が続けられない」「子供が嫌い」などで、いずれも自分勝手な理由で占められている。

しかし、もともと昔には「間引き」といって、口減らしのため生まれてすぐに殺されてしまう子供も大勢いたわけで、そう思うと貧しすぎても豊かすぎても健全な母性は育たないものなのか、あるいは母性とは本能的な感情でありながら、社会情勢や世相に安易に追随する類のものなのだろうか、などという考えも抱くようになる。

女性があこがれる職業の代表に保母や看護婦が

あった。小さな子供の世話をする保母と心身を病んだ人々の生活全般を看る看護婦は、誰も明言こそしないものの、両者とも母性をもっとも発揮される職業だと認識されていたと思う。

しかし、世の流れで男女平等が何より大事とばかり、

感じさせない呼び名に様変わりしたのだ。そうすることで結果的に母性を曖昧（あいまい）にしてしまったことにはほとんど誰も触れないが、いまだきあえてそんなことを指摘する人もいなくなつてしまった。



母への思いを残して

かり、保母ではなく保育士、看護婦ではなく看護師とその名を改めることになった。いうまでもなくその仕事には男性も従事するのだから、それが彼らの権利を守り、かつ平等の正しい姿なのだといわんばかりに、性差を

ろう若者たちの声なき声は、母性とは何かの問いに少しは答えているように思える。

作家、山田風太郎は1986年「人間臨終図鑑」という不思議な本を上梓（し）した。それは、死亡した年齢別に著名人の死に様を紹介したものであり、例えば「41歳で死んだ人々」の章には、今川義元・マタハリ・アベベ・大久保清らの名が連ねてある。

中に、35歳で死んだ正岡子規がある。結核性の脊髄（せきつい）カリエスに冒された子規の痛みとの戦いは、その凄（すさ）まじさゆえあまりに有名である。長い間、子規の妹とともに看病にあたった老母は、ある日子規が死んでいるのを知り、その手を握って「サア、もいっぺん、痛いというてお見」と言い、涙を流したとある。